

國學院大學學術情報リポジトリ

和歌における比喩の表現形式

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學国語研究会 公開日: 2025-06-02 キーワード (Ja): 和歌の修辞, 比喩, 直喩, 隱喩 キーワード (En): 作成者: 小田, 勝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001689

和歌における比喻の表現形式

キーワード…和歌の修辭 比喻 直喩 隱喩

一 はじめに

「^{フイギョア}比喻」とは、動作・状態を他のものに喩える言語表現である。一般に、「…(の) ようだ」などの比喻標識を用いるものを「^{シメリ}直喩」と呼び、比喻標識を表示しない形式を「^{メタファー}隱喩」と呼ぶのだが、これについては二つの問題があると思う。第一点は、ふつう隱喩と呼ばれるものに、二つの異なるものがあるのではないかということである。

1 a もとより君はかぐはしく／^{あで}阿艶に匂へる花なれば

b ^{あによめ}（萩原朔太郎「昨日にまざる恋しさの」『氷島』）
嫂は返事をする前に、一応代助の様子を、試験官

小田 勝

の眼で見た。（夏目漱石『それから』）

c 「私ノ夫ハ」いかなる花（＝美女）をも見て、心を移したるや。よくよくねんごろに占ひて給はり候ふべし。（御伽草子「弥兵衛鼠絵巻」新潮日本

古典集成）

すなわち右の1 a は「君」を「花」「ノヨウ」なれば、b は「試験官の「ヨウナ」眼」と、「君」や「眼」を類似する別のもの（後述するように、正確に言えば「カテグリー」を異にする別のものである）に喩えた「^{シメリ}比喻」であるが、c は「美女」という事物の名称を類似性に基づいて「花」に変更した「^{シメリ}名辞変更」と捉えられる。和歌の例をあげ

ば、次例2の傍線部はいずれも隠喩と呼ばれるであろうが、この考えかたによれば、2 aは比喩、bは「涙↓海」の名辞変更といえる。

2 a なごの海の霞の間よりながむれば入日を洗ふ沖つ

白波（新古今・三五）^①

b しきたへの枕の下に海はあれど人をみるめは生ひ
ずぞありける（古今・五九五）

すなわち、「○喩」（直喩を除く）と呼ばれるものは、喩えを述語や修飾語として表現するところの「比喩」と、項として表示される名詞、その他の文中の語・語句・表現を、類似性・関連性等に基づいて別の語・語句・表現に変更するところの「名辞変更」とに分けられるのである。

もう一つの問題は、——これは誰しも問題にすることであるが——比喩標識とは何かということである。今、人間である「彼」について、3 aのように表現すれば直喩、bは隠喩ということになるのだが、

3 a 彼は虎のようだ。

b 彼は虎だ。

それでは、3 aに対して、これを次のように変形すると、

どうなるだろうか。

3 c 彼には虎のような獐犇さがある。

d 虎ほどの獐犇さをもった彼は、

e 彼は虎よりも恐ろしい。

f 彼は虎ほどではないが、恐ろしい人だ。

g 彼は虎に似ている。

cは直喩、e・gは事実を述べた文、d・fは何とも言いにくいということになるだろうか。^②しかし分類はどうあれ、c・gのいずれも、人間である「彼」について、「彼」が属さないカテゴリーであるところの「虎」を用いて表現しているという点では共通している。稿者は和歌における修辭体系を捉える一環として、和歌における比喩の表現形式を確認したいのだが、そのために一度は比喩と呼ばれる表現形式を3 c・gのようなものにまで——つまり「似ている」のような事実を述べた文にまで——拡張して、その表現形式を洗い出してみることも必要ではないかと考えるものである。かかる要請に基づいて、本稿では、比喩を広く、※ ある事物が、それとは異なるカテゴリーに属する別の事物と類似していると述べる表現

と捉え、和歌におけるその表現形式にはどのようなものがある（あり得る）か、素描してみようとするものである。

※は本稿における比喩の定義であるが、傍点部分（非事実の認識（国立国語研究所（一九七七）二八頁）が必須の条件であることに注意されたい。また、繰り返すが、本稿では1cのような「名辞変更」は比喩とは別のものと考えていて、本稿では扱わない。

二 比喩であることを表す語を用いた比喩表現

まず、当然ながら、比喩であることを示す機能語（付属語）を用いる比喩表現がある。いわゆる比況の助動詞を用いるもの、比喩を表す助詞「の」、「に」、「と」を用いるものである。⁴⁾

4 a あをによし奈良の都は咲く花のにほふがごとく今

盛りなり（万葉集・三二八）

b 吉野川岩波高く行く水のはやくぞ人を思ひそめて

し（古今・四七一）

c 我が泣く涙 有間山 雲居たなびき 雨に降りき

や（万葉集・四六〇）

d ふるさとは雪とのみこそ花は散るらめ（古今・一一一）

上代の「一なす」「一もころ」は、「∴のような」「∴のように」の意を作る接尾辞である。⁵⁾

5 a ま玉なす二つの石を 世の人に示し給ひて（万葉集・八二三）

b 綜麻かたの林の前のさ野榛の衣に付くなす目につ

く我が背（万葉集・一九）

6 我が大君の 立たせば玉藻のもころ 臥やせば川藻のごとく（万葉集・一九六）

「∴に似たり」は「如し」「やうなり」と同意の慣用連語である。

7 いにしへの尾上の鐘に似たるかな岸打つ波の暁の声

（新古今・一九六八）

動詞を用いた表現で、「∴にたとふ」「∴によそふ」というのは、譬えとして直接的であろう。

8 a 白露も夢もこの世もまほろしもたとへて言へばひ

さしかりけり（後拾遺・八三一）

b 世の中にふれどかひなき身のほどはたまらぬ雪に

よそへてぞ見る（統拾遺・六五〇）

c 愛しみ我が思ふ君はなでしこが花になそへて見れ
うらは

ど飽かぬかも（万葉集・四四五二）

ほかに、「あやまつ」「分かず」「かよふ」「心地す」「見ゆ」「見る」「思ふ」なども比喩表現を作る。

9 a み吉野の山辺に咲ける桜花雪かとのみぞあやまた
れける（古今・六〇）

b 水や空空や水とも見え分かず「ソノ水ト空ト二」
かよひて澄める秋の夜の月（新後拾遺・三七二）

c 煙立つ小野の炭竈雪積みて富士の高嶺の心地こそ
すれ（長秋詠藻）
すみがま

d 大空にあらぬものから川上に星とぞ見ゆる篝火の
影（貫之集）

e 山川の水の水上尋ね来て星かとぞ見る白菊の花
（長秋詠藻）

f 秋の月昼とは見えて冴え寒し雪と思ふは庭の白露
（千五百番歌合）

三 判断文による比喩表現

判断文「AはBなり。」の形で比喩を表すのは典型的な
隠喩の構文で、現代語ではふつう「彼は虎だ。」（≡3b）
のように「AをBに喩える」（Aが実際の事物（実像）で、
Bが喩（虚像））ことを表すのだが、和歌の場合は、この
句型——多くは「けり」を伴って「AはBなりけり。」の
形になる——で、「AをBに喩える」場合と「BをAに喩
える」場合との二つがあるから、注意が必要である。次例
10は「AをBに喩える」（Aが実像、Bが虚像）である。

10 a 嵐吹く三室の山のみぢ葉は龍田の川の錦なりけ
り（後拾遺・三六六）
みぢう

b むばたまの夜のみ降れる白雪は照る月影の積もる
なりけり（後撰・五〇三）

次例11は逆に、「BをAに喩える」（Aが虚像、Bが実像）
である。Aに見えたが実はBだったという方が表現に力が
出るので、和歌ではこちらの型（11の型）の方が多いので
はないかと思う。念のため10dに近世の例もあげておく。

11 a 秋風に声をほにあげて来る舟は天の門わたる雁に
あま

ぞありける（古今・二二二）

b 河竹の夜ごとに燈す篝火は宿る螢の光なりけり
（二条院讃岐集）

c 人知れぬ思ひを常にするがなる富士の山こそ我が
身なりけれ（古今・五三四）

d 夏川の水隈隠れの乱れ藻に夜咲く花は螢なりけり
（桂園一枝）

そのような次第で、次例12のような歌にあつては、「氷魚」と「氷」のどちらが実像なのか一瞬とまどうが、これも11の型である。

12 月清み瀬々の網代にに寄る氷魚は玉藻に冴ゆる氷なりけり（金葉・二度本・二六八）

Aに見えたが実はBだったという、そのAの提示は「…は」以外でも表すことができ、例えば次例13も、述語の方が実像である。

13 伊勢の海の清き浜辺に照る影を玉と拾へば螢なりけり（守覚法親王集）

3bの「彼は虎だ。」のバリエーションとしては、「彼の名は虎だ。」のようなものもある。

14 東路の勿来の関は我が恋ふる人の心の名にこそあり
（あづまぢ なこそ）

けれ（散木奇歌集）

「AはBか」という疑問文の形式でも、BがAとは異なるカテゴリーに属するものであるならば（定義※における傍点部分の条件）、比喩表現となる。

15 a 空晴れて散り来る雪はひさかたの月の桂の花にや
あるらん（長秋詠藻）

b 谷風にとくる氷のひまごとにうち出づる波や春の
初花（古今・一二）

「AはBなれや」「AはBかも」というのは、AをBに喩える形式であるが、和歌では上の句側にこれが置かれて、後続の句でそのように喩えた理由が説明されるのが一般的な形である。

16 我が恋は深山隠れの草なれやしげさまされど知る人の
なき（古今・五六〇）

17 玉梓の妹は玉かもあしひきの清き山辺に撒けば散り
ぬる（万葉集・一四一五）

この句型は、ある事物を二見類似性も隣接性もない謎の事物に喩え、後でその謎を解き明かして、なるほどそのよう

な比喩が成立すると相手に納得させるもので、要するに「謎かけ問答」である。このような表現を小田勝（二〇一七）では「謎喩」と呼んだ（稿者の造語⁽⁷⁾）。

ある物が、それとはカテゴリーを異にする別の物に「なりゆく」「なる」という表現も、——それが事実でないならば（＝比喩の条件）——比喩（隠喩）ということになるう。

18 a 桜咲く比良の山風吹くままに花になりゆく志賀の

浦波（千載・八九）

b 草むらの虫の声より暮れそめて真砂^{まさご}の上ぞ月にな

りぬる（風雅・五七九）

c 岩が根の凝り敷く山を越え来れば我が黒駒も木に
なりにけり（夫木和歌抄）

「Xならねど」の形で、「Xではないが、Xと同じように」の意をつくることがある。このような「：ならねど」も比喩表現といえる⁽⁸⁾。

19 a 人を思ふ心は雁にあらねども雲居にのみもなきわ

たるかな（古今・五八五）

b ひとり寝る床は草葉にあらねども秋来る宵は露け

かりけり（古今・一八八）

c 春風にあらぬ身なれど桜花たづぬる人に厭はれに
けり（散木奇歌集）

次例20のような「Xとも見えなく」「Xともなしに」も、Xであることを否定しながら、「Xのようである」の意を表すものである。

20 a 秋の野の草は糸とも見えなくに置く白露を玉と貫^ぬ

くらん（後撰・三〇七）

b 磯^{いそ}菜摘む海人^{あま}とはなしに我ぞこのまだしほしほと
濡れぬ日ぞなき（山田法師集）

順接の否定表現は、例えば「Xならねば」は「Xではないから」「Xと異なるので」の意になるから、比喩にはならない（定義※には合致しない）。

21 胸に満つ思ひはあれど富士の峰^ねの煙ならねば知る人
もなし（新後撰・七七八）

四 異なる二つの事物の比較ということ

本稿における比喩の定義※は、要するにカテゴリーを異にする二つの異なる事物が、何らかの点では同じであると

いう同等比較判断なのであって、このように考えれば、比喩とは畢竟比較表現であるとも捉えられる。同等比較の表現には「：まで（に）」「：ばかりに」がある。

22 a 整ふる鼓の音は 雷の声と聞くまで 吹き鳴せる

小角の音も：（万葉集・一九九）

b あさぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪（古今・三三二）

「：ばかりに」は今のところ和歌では拾えていない。

23 そこの人集まりて、里も響くばかりにののしりあり。（東関紀行）

そのような次第で、「志は富士山よりも高い。」のように、優等（劣等）比較表現も容易に比喩表現に転じることになる。「一日の命、万金よりも重し。」（徒然草）、「木麿子よりも小さき玉にてぞありける。」（宇治拾遺物語）のように過大（過小）な事物（くだいようだが、カテゴリーを異にする事物である）を持ち出して、それ以上であると非事実的に（空想的に）表現することで比喩となるもので、24 a は名詞と名詞との比較、b c は事態と事態との比較の例である。

24 a むら時雨晴れるあとの山風に露よりもろき峰の

紅葉ば（新千載・六一二）

b 行く水に数かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり（古今・五二二）

「いづれまされり」という、優等比較を疑問文形式で表現したものも多い。

25 曇る夜の月と我が身の行く末とおほつかなさはいづれまされり（後拾遺・八七〇）

「：より」を使わない次のような例も、比較による比喩といえよう。

26 我が恋はよむとも尽きじありそ海の浜の真砂はよみ尽くすとも（古今・序）

過大（過小）なものと同等であると表現すれば、「張喩」（誇張法）ということになる。過大な事物との同等比較判断があればよいので、句型として必ずしも比較構文である必要はない。賀歌には27 e のような表現が多い。

27 a 我が恋の数をかぞへば天の原曇りふたがり降る雨のごと（後撰・七九五）

b ひとり寝の床にたまれる涙には石の枕も浮きぬべ

らなり（古今六帖）

c 恋ひわびて音をのみ泣けば敷妙^{しきまへ}の枕の下に海人ぞ釣^つりする（俊頼髓脳）

d 音にのみありと聞き来しみ吉野の滝は今日こそ袖に落ちけれ（新古今・九九一）

e 君が代は千世^{ちよ}に一度^{ひとたび}ある塵の白雲かかる山となるまで（後拾遺・四四九）

過小な事物との同等比較では、次のような例がある（28 a は春秋の経過を二日と表現したものである¹⁰）。

28 a 昨日こそ早苗とりしかいつのまに稲葉そよぎて秋風の吹く（古今・一七二）

b 恨むるも恋しといふも聞き解けば響きと声と 水

と氷と（『ノヨウニ大差ナイモノダ』（散木奇歌集）

さて、27 a・27 c・28 bのような表現では、比較される

二つの事物が複文として一文中に連置されているのだが、これをさらに拡張して、二文の連置を考えてみよう。和歌には、人情を表す句と、情景を表す句とを連置する手法があつて、稿者はこれを「情—景連置」と呼んでいるのだが、このような文の連置も、異なる事態を表す二文間の同等性

が示されたものと捉えることができよう。

29 a 物思ふ心の秋の夕まぐれ—真葛が原に風渡るなり（拾玉集）

b 三十^{もそち}よりこの世の夢は破れけり—松吹く風やよその夕暮れ（心敬集）

すなわち右のような二文連置は、比喩なのである。¹¹

ある思想を、丸ごとまったく別の事柄を語る一文で表現するものは「諷諭^{アレゴリー}」と呼ばれる（万葉集にいわゆる「寄物陳思歌」、ことわざの「掃き溜めに鶴」、¹²「鶯が鷹を生む」の類である）。

30 a 三島昔いまだ苗なり時待たば着ずやなりなむ三島

菅笠（万葉集・二八三六）

b 越えぬ間^まは吉野の山の桜花人づてにのみ聞きわた

るかな（古今・五八八）

c よそにのみ見てややみなん葛城や高間の山の嶺の

白雲（新古今・九九〇）

d 心から浮きたる舟に乗りそめて一日^{ひとひ}も波に濡れぬ

日ぞなき（後撰・七七九）

e 思へただ野辺の真葛も秋風の吹かぬ夕べは裏見や

はする（新後撰・一一七一）

諷諭であることが分かるためには、文中の一つ以上の語が、実は別の事柄を指しているということが了解されなければならぬ。それには、二つの型があつて、一つは隠喩によるもの（30 a 「三島菅＝少女」、b 「桜花＝女性」、c 「嶺の白雲＝手の届かない女性」、d 「舟＝男、波＝涙」、もう一つは同音を利用した掛詞によるもの（e 「秋＝飽き、裏見＝恨み」）である。

五 ささまざまな比喩表現

本節では、和歌にみえるその他の比喩表現をみてゆこう。いずれも如上の比喩表現を変形させたものである。

まず、比喩表現というのは、「喩える」ことによつて「喩えられる事物」のありようをより具体的に描写するものであるのだが（例えば3 b の「彼は虎だ。」というのは、喩えられる「彼」のありようを述べた文である）、その逆、例えば、

31 この虫も、きつと私のように悲しんでいるだろう。
で、「私は悲しい」の意を伝えるとすれば、「喩える」こと

によつて「喩える事物」のありようを詳しく述べる（ことを本意とする）文ということになる。このような比喩を「反照比喩」と呼ぼう。次のような例がある。次例32 a は「我がごと」と言いながら、言いたいことは「我はもの悲し。」ということである。

32 a 秋の夜をあくるも知らず鳴く虫は我がごとものや
悲しかるらん（古今・一九七）

b 我ならぬ草葉もものは思ひけり袖よりほかに置ける白露（後撰・一二三二）

次に、同定性判断の強制。次例33は、「…のようだと思え」と相手に強制する表現である。

33 a 今日だにも庭を盛りとうつる花消えずはありとも
雪かとも見よ（新古今・一三五）

b 恋しさの身よりあまれる思ひをば夜半の螢によそへても見よ（新後撰・一二八六）

次例は、逆に「…のように喩えるな」という表現である。

34 燃ゆれどもしるしだになき富士の嶺に思ふ中をば喩へざらん（貫之集）

次に、3 a を、

35 彼は、虎のように獐猛ではない。

のようにすることを考えてみよう（35は両義文を作る形式だが、ここではもちろん「虎は獐猛で、彼は獐猛ではない」の意である）。これは「彼」と「虎」との間に同等性がないということと主張する表現であるが、「彼」について、一度カテゴリーの異なる「虎」を持ち出して、両者の同等性を計量する点で、一度喩えた上での否定ということができる。一種の「曲言法」^{リトート}、「修辞否定」である。36 aの「水の」の「の」は比喩を表す「の」で、「水の（水ノヨウニ）↓音には立つ」となるところを、「音には立てじ」と否定されて、驚かされるわけである。

36 a 吉野河岩きりとほし行く水の音には立てじ恋ひは死ぬとも（古今・四九二）

b 虫のごと声に立てては鳴かねども涙のみこそ下にながるれ（古今・五八一）

人はよく「喩えようもない」という表現で、最大級の悲しみや喜びを表現する。これは比喩を試みようとして不能であったということであって、「言へばおろかなり」などの「名状不能」表現の一つである。

37 a たとへても言はむかたなし月影に薄雲かけて降れ

る白雪（千載・四五〇）

b 置くと見し露もありけりはなくて消えにし人へ何にたとへん（新古今・七七五）

c 君が代を何に喩へむと思へども果てなきものあらばこそあらめ（頼政集）

d 桜花また立ちならぶ物ぞなき誰まがへけん峰の白雪（別雷社歌合）

言語の技術である比喩表現において、最も変わったものは、眼前の物体を指して、「お前はこれ（のよう）だ」のように、物事を眼前の事物に喩えるものである。次のような例がある。⁽¹⁾

38 女、石と瓦とをつつみて

我が仲はこれとこれとにけり頼むと「別レノ」憂きといづれまされり（一条摂政御集）

六 終わりに

和歌の比喩研究は、従来、ある語がどのように喩えられるかという「喩辞」（喩える物）の研究が中心で、どのよ

うな構文・句型で比喩表現が行われ(得)るのかということとは、あまり考えられて来なかったように思われる。¹⁵⁾ 和歌における比喩は、一方では見立て、一方では類似性にもとづく語の産出に関わると考えられ、¹⁶⁾ 喩辞の研究とともに比喩の表現形式についても、和歌の表現史に組み入れられるべきであろうと思う。

注

(1) 举例の出典は、万葉集は新日本古典文学大系、古今和歌集は岩波文庫、その他の和歌はすべて『新編国歌大観』による(若干の散文作品は通行の本文によった)。勅撰集は「和歌集」の名称を省略して示した。勅撰集には新編国歌大観番号を、万葉集には旧国歌大観番号を付した。いずれも、引用に当たり、表記は私に改めた。

(2) 直喩はまた「明喩」とも呼ばれるが、3aのように喩える事物のみを表示するものを「直喩」、3cのように類似点をも合わせて表示するものを「明喩」と区別することもある。その立場では、例えば古典文の次例aは直喩、bは明喩ということになる。

・ a おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。
(平家物語)

b このあらん命は、葉の薄きがごとし。(源氏物語・手習)

また3aのように限定の無い事物に喩えるものを「単一直喩」、「腹を空かせた虎のようだ」のように限定された事物に喩えるものを「拡充直喩」などと呼ぶことがある。その立場では、例えば古典文の次例は拡充比喩ということになる。

・ 夜もすがら草葉につたふ蜜こそ風にこぼれぬ露と見えけれ(正治初度百首)

3fは、実例をあげれば、次のようなものである。

・ 末遠いパノラマの中で、火花は星水母ほどのさやけさに光つては消えた。(梶井基次郎「城のある町にて」)

(3) 稿者は、和歌における全修辞を、(一) 配語操作、(二) 名辞変更、(三) カテゴリー変容の三種と捉えていて、比喩は(三)の一種として(二)と区別されるべきものと考えている(小田勝(近刊))。

(4) 「AのB」の形で、「AのヨウナB」ではなくて、「BのヨウナA」の意を表すことがある(「限定語反転」という)。

・またや見む交野のみ野の桜狩花の雪（『雪ノヨウナ花』
散る春の曙（新古今・一一四）

見立ての表現に用いられる「BのA」は、だいたい「Aの
ようなB」の意である（糸井通浩（二〇一八）四五二頁参
照）。

・天の海に雲の波立ち月の船 星の林に漕ぎ隠る見ゆ（万
葉集・一〇六八）

・空の海 霞の網はかひぞなきかけても止めぬ春のかりが
ね（永享百首）

歌語「苔の緑」は「緑苔」、「霞の衣」は「衣のような霞」
の意である。これらの「の」は比喩の「の」ではなく、そ
の語順を反転させた「配語操作」（注3にいわゆる（一）
である）と考える。

（5）「「じもの」は「…のようなもの」の意の名詞をつくる接
尾辞なので、名辞変更と捉えられるのだが、「犬じもの道
に伏してや命過ぎなむ」（万葉集・八八六）のように、連
用修飾語として「まるで…のように」の意で用いられる
ことが多い。比喩にならない例もある。小柳智一
（二〇一四）、半沢幹一（二〇二二）二四～二五頁参照。

（6）措定文の一種であること、多門靖容（二〇一四）の第一

章に分析がある。

（7）用例16のような類似性の機知によるものと、

・我が恋は葛の裏葉の風なれや靡きもあへず吹き返しつる
（俊忠集）

・我が恋は雲居に見ゆる月なれや影になれども逢ふよしも
なし（久安百首）

・煙立つ小野の炭竈我なれや嘆きをつみて下に燃ゆらん（新
千載・一八四〇）

同音性（掛詞）の機知によるものがある。

・夏の夜は浦島の子が箱なれやはかなくあけて悔しかるら
ん（拾遺・一二二）

・雲もなくなぎたる朝の我なれやいとほはれてのみ世をば経
ぬらん（古今・七五三）

・冬川の上は凍れる我なれや下になかれて恋ひわたるらん
（古今・五九一）

（8）木下正俊（一九七二）で「逆接の比喩」として指摘され
ている。なお注9を参照。

（9）半沢幹一（二〇二二）は、19・20の類を「比喩発想の否
定表現」、24の類を「比喩発想の比較表現」とし、「違う
けれども同じという方に重点を置くのが直喩表現である

のに対して、同じだけれども違うという方に重点を置くのが比較や否定の表現である」(一五四～一五五頁)と指摘している。重要な指摘であると思うが、稿者は同等比較のバリエーションとして優等(劣等)比較を考えており、また「志は富士山よりも高い。」というのは高度差の表現を借りて、結局カテゴリーの異なる「志」と「富士山」とが高度に関して同質であると述べている点で、本稿での※の定義に叶うと考える。次例は同等比較が比喻であることを示している。

・地球の重さに匹敵するとまでた、とえられ、個人の生命。それを奪った者が、許されていい理由はない。(星新一「処刑」『ようこそ地球さん』)

なお、半沢幹一(二〇二二)では、何かを別の何かと「仮定」する表現と、別の何かでありたいと「希求」する表現にも比喻意識を指摘している(一四～一五頁)。これも首肯できるものの、類似性を仮定したり希求したりするのは、類似していないという判断に基づくわけだから、本稿の※の定義には合致しない。

(10) 「古歌に昨日こそといふは、昨日のやうにおぼゆるをいふ。誠の昨日にはあらず。」(藤井貴尚「歌のしるべ」)。謙遜・

卑下のために、自分に関わる物を、小さい物、粗末な物と表現することがある(「数ならぬ身は、え聞き候はず」と答へられけり。」「徒然草)。次例は張喩の名辞変更の例。いとどしく虫の音しげき浅茅生(『自邸』)に露置き添ふる雲の上人(源氏物語・桐壺)

(11) 茂吉の「たたかひは上海に起り居たりけり一鳳仙花紅く散りあたりけり」(赤光)のようないわゆる「疎句」も同様である。「一向不案内であるが、俳句の「湯豆腐や一命の果てのうすあかり」(万太郎、「別かるるや一夢一筋の天の川」(漱石)のような連置も、広く「比喻」といえるだろうと思う。連置が比喻であるということは、事物の列挙もそうである可能性があり、これについては『枕草子』の類聚章段を分析した多門靖容(二〇一四)第九章を参照。でけるものかな。みさごといふ鳥の鷹を生めるをぞ、かかる譬ひに人は言ふめる。」(源家長日記)

(13) 「ともかくも言はばなべてになりぬべし音に泣きてこそ見すべかりけれ」(千載・九〇六)

(14) よく分からない章段だが『論語』(八佾)に「其如示諸斯乎、指其掌」(其れ諸れ(「天下」)を斯(「掌」)に示るが

如きかと。其の掌を指す。(岩波文庫による) という例がある。

- (15) 和歌の比喩表現において、どのような句型がないか、というのは難しい問題だが、興味のある問題でもある。例えば、次のような句型は、今のところ稿者は古典和歌中に拾えていない。

・さうして只自然の恵から来る月日と云ふ緩和剤の力丈で、
漸く落ち付いた。(夏目漱石「門」)

右の句型は連体修飾を用いた比喩であるが、面白い性質をもっている。すなわち右例は「緩和剤ノヨウナ月日」の意で、前方(連体修飾中の語)が「被喩」で、後方(連体修飾の主名詞)が喩である。多門靖容(二〇一四)第二章に分析がある。

- (16) 和歌にとって「語の産出の機構(自動化装置)」が重要であらうということ、小田勝(近刊)で述べた。

引用文献

糸井通浩(二〇一八)『古代文学言語の研究』和泉書院

小田勝(二〇一七)「和歌のレトリックの体系―通言語的な観点から―」『國學院大學紀要』55

小田勝(近刊)「掛詞の修辭的位置」『文学・語学』236

木下正俊(一九七二)『万葉集語法の研究』塙書房

国立国語研究所(一九七七)『比喩表現の理論と分類』秀英出版

小柳智一(二〇一四)「『じもの』考―比喩・注釈―」『万葉集研究』35

多門靖容(二〇一四)『比喩論』風間書房

半沢幹一(二〇二二)『古代歌喩表現史』笠間書院

付記 本稿成稿後、半沢幹一(二〇二二)を得、本稿全体を改めて見直すことができた。記して学恩に感謝する次第である。同書には多くの比喩(的)表現が指摘、揭示されていて、当然のことながら本稿に示すものと重なる形式も多い。しかし同書と本稿とでは比喩の認定や整理のしかたが大きく異なり、また本稿には同書に指摘されていない表現形式の揭示も(多少は)あるので、当初の計画通り、本稿を公にすることにした次第である。